



建造物でめぐるオホーツク

# オホーツクの建造物

ダム・橋梁・交通・歴史的建物ほか

企画・編集／オホーツク 21 世紀を考える会



企画・編集／オホーツク 21 世紀を考える会  
〒093-0012 北海道網走市南 2 条西 3 丁目 網走建設会館内  
TEL.0152 - 43 - 2519 FAX.0152 - 43 - 6810



<http://www.ok21.or.jp>

2019 年 4 月発行

編集協力／株式会社 地域計画  
印刷／株式会社 坂井印刷

※掲載情報は取材時のものです。その後変更になる場合がございます。

## オホーツク21世紀を考える会

網走建設業協会会員オーナー有志が個人の資格で会員となり、4つの「地域戦略」「IT推進」「オホーツクライフ」「ニュービジネス」委員会を中心に、オホーツク経済の自立とオホーツクライフ充実のために各種調査、提言シンポジウムの開催、情報ネットワーク等の事業を立上げるなど幅広い地域貢献活動を進めています。

### 「ニュービジネス委員会」の紹介

当委員会のコンセプトは、「オホーツクの自立を目指し、それぞれの地域特性を生かした新たなビジネスの創造に取り組む」であり、「わが村は美しく一北海道」運動を支援し、地域活動を盛り上げ、魅力溢れる「わが村わが町を誇りに思う」地域づくりに寄与したいと考えております。

#### ニュービジネス委員会

委員長 鴨下 辰哉(北辰土建(株))

副委員長 久保 毅剛(日東建設(株))	松谷 和秀(松谷建設(株))
委員 嘉野 浩一(五十嵐建設(株))	委員 高橋 廣志(鐘ヶ江建設(株))
委員 石井 英治((株)菅野組)	委員 菊地 義暁((株)菊地組)
委員 岸 良明((株)岸組)	委員 河面 孝三((株)河面組)
委員 中原 敏晃(佐呂間開発工業(株))	委員 河原 隆((株)三和建設)
委員 土田 好起(斜里建設工業(株))	委員 大沼 剛(聖太建設(株))
委員 今野 政男(大同産業開発(株))	委員 丹野 義晴(丹野工業(株))
委員 野口 恵司((株)野口建設)	委員 工藤 隆寛((株)藤共工業)
委員 加藤 敏和(船橋西川建設(株))	委員 三浦 博之((株)北興)
委員 鈴木 栄樹(北進工業(株))	委員 小原 誠(北洋建設(株))

目次	
ダム	鹿ノ子ダム ..... 04
	富里ダム ..... 05
	卯原内ダム ..... 06
	古梅ダム ..... 07
	緑ダム ..... 08
	雄武ダム ..... 09
橋梁	平成高架橋 ..... 10
	栄浦大橋 ..... 11
駅通・鉄道	旧武華駅通 ..... 12
	旧上藻別駅通 ..... 13
	越川橋梁 ..... 14
	鴻紋軌道鉄橋 ..... 15
	旧国鉄北見相生・北見滝ノ上・上興部駅 ..... 16・17
	オホーツクの国鉄路線の変遷 ..... 18・19
歴史的建物	網走刑務所正門 ..... 20
	ピアソン邸(ピアソン記念館) ..... 21
	網走市立郷土博物館 ..... 22
	旧斜里町立図書館 ..... 23
	北見ハッカ記念館 ..... 24
	旧五十嵐家住宅(ハッカ御殿) ..... 25
	屯田兵屋(北見・端野・湧別) ..... 26・27
	北海道家庭学校礼拝堂 ..... 28
	紋別武徳殿 ..... 29
	日本キリスト教会遠軽教会 ..... 30
	紋別灯台 ..... 31
その他	網走港帽子岩ケーソンドック ..... 32
	アイスブーム ..... 33

## 発刊にあたって

私たちオホーツク21世紀を考える会は、インフラ整備等の公共事業に多く関わっていることから、地域の基盤づくりの一端を担う立場として、これまで様々な地域貢献活動に取り組んでまいりました。

ニュービジネス委員会では、観光促進や域内交流へつなごうことを目的に、オホーツクの魅力を食の観点から取り上げた『オホーツクお土産地典』、『OKグルメ地典』の発行、『農家のうちごはん展』のイベント開催などを行ってきました。

近年においては、全国的にダムブームが高まり、鉄道マニアや廃墟マニアといった人たちも増え、観光に多様な価値観が求められてきています。そうした背景から、このたび発刊した『オホーツクの建造物』では、建造物に焦点を当てながら、それから見えてくる地域の歴史や特性をあぶり出し、新たな観光資源の発掘に努めようと考えました。オホーツクの美しい景観や観光スポットを巡る途中にでも立ち寄っていただき、オホーツク地域への理解を深めてもらえると、幸いと考えます。

### オホーツク21世紀を考える会 ニュービジネス委員会



下流側の堤体には芝生が植えられ「富里ダム」の文字も描かれていて美しいダムと言える。

**DATA 富里(とみさと)ダム**

ダム形式：ロックフィル  
 河川名：仁頃川／常呂川水系  
 所在地：北海道北見市宇富里  
 位置：北緯 43 度 51 分 19 秒、東経 143 度 45 分 12 秒  
 着工年：1969 年 完成年：1987 年  
 用途：かんがい用水  
 堤高：44.3m 堤頂長：280.0m  
 堤体積：444,000 立方 m  
 湛水面積：21ha 総貯水量 2,800,000 立方 m  
 有効貯水量：2,630,000 立方 m  
 ダム湖名：富里湖（とみさとこ）



堤体を覆う岩（ロック材）が整然と敷き詰められているのが、よくわかる。

ダムに伴う人造湖である富里湖は二〇〇五(平成一七)年に、財団法人ダム水源地環境整備センターが選定するダム湖百選に選ばれている。富里湖と辺り一帯は富里湖森林公園として整備され、夏はキャンプ、冬はワカサギ釣りが楽しめる。

仁頃川上流に建設された富里ダムは、農耕期（五〜九月）の降水不足や、農地の多くを占める丘陵傾斜地帯の土地改良を目的としたかんがい用水専用ダムである。このダムから総延長一〇二kmのパイプラインが延び、農地に水を供給している。

**file02**

とみさと  
**富里ダム**

北見の畑作を支える農業専用ダム。ダム湖の富里湖一帯は森林公園として整備され、市民に憩いも提供している。



高さ 55.5m の重力式コンクリートダム。直線的な構造はモダンなデザインに感じる。

**DATA 鹿ノ子(かのこ)ダム**

ダム形式：重力式コンクリート  
 河川名：常呂川／常呂川水系  
 所在地：北海道常呂郡置戸町字常元  
 位置：北緯 43 度 36 分 26 秒、東経 143 度 23 分 16 秒  
 着工年：1972 年 完成年：1983 年  
 用途：洪水調節、不特定利水、灌漑、上水道  
 堤高：55.5m 堤頂長：222.0m  
 堤体積：204,000 立方 m  
 湛水面積：210ha 総貯水量：39,800,000 立方 m  
 有効貯水量：35,800,000 立方 m  
 ダム湖名：おけと湖（おけとこ）



ダムによってできた人造湖「おけと湖」。冬になると湖が結氷し、ワカサギ釣りを楽しむことができる。

鹿ノ子ダムは、オホーツク海に注ぐ河川に建設されたダムの中では唯一、治水機能を持った多目的ダムである。常呂川の治水と北見市など流域市町村への利水を目的に、一九六八(昭和四三)年に計画を策定し、ダムの建設着工は一九七九(昭和五四)年、一九八三(昭和五八)年に完成した。ダムによってできた「おけと湖」は、周辺にキャンプ場も整備されたが現在は閉鎖中である。冬季は全面結氷して、ワカサギ釣りを楽しむことができ、冬のレジャースポットとなっている。

**file01**

かのこ  
**鹿ノ子ダム**

洪水調節や農地への新規灌漑のほか、北見市・置戸町・訓子府町・留辺蘂町への上水道供給を目的とした多目的ダム。

file03

## 卯原内ダム

農業用水の確保と、洪水の一時貯留によって、田畑を守る農業用ダム。



卯原内川上流に建設された卯原内ダム。卯原内川は能取湖へと流れ込む。

卯原内ダムは、国土交通省

北海道開発局が国営灌漑排水事業・網走川下流地区の事業の一つとして建設し、網走市が管理する灌漑用のダムである。ダムの建設着工は一九七七（昭和五二）年、完成は二〇〇〇（平成十二）年。

灌漑目的の農業用ダムは、雪解け水または雨水を貯めておいて、雨があまり降らない農耕期（五月～一〇月）に、田畑へ水を供給することが目的である。また、農業用ダムは洪水の一次的貯留によって田畑を守る役割を兼ねることもある。



堤の麓には、大型の駐車場が整備されている。

## DATA 卯原内(うばらない)ダム

ダム形式：中心不透水性ゾーン型フィルダム  
河川名：卯原内川／卯原内川水系  
所在地：北海道網走市宇卯原内  
位置：北緯43度58分39秒，東経144度04分11秒  
着工年：1978年 完成年：2000年  
用途：灌漑  
堤高：40.5m 堤頂長：355m  
堤体積：820,000立方m  
湛水面積：34ha 総貯水量：4,300,000立方m  
有効貯水量：4,000,000立方m

file04

## 古梅ダム

夏場は比較的降水量の少ない美幌町・大空町の農業用水を確保する、貴重な水瓶となっているダム。



ダム管理事務所周辺は駐車場や展望台が整備されている。堤体には芝が植えられて非常に美しいダムだ。

## DATA 古梅(ふるうめ)ダム

ダム形式：ロックフィル  
河川名：網走川水系石切川  
所在地：北海道網走郡美幌町  
位置：北緯43度41分56秒，東経144度13分35秒  
着工年：1972年 完成年：1996年  
用途：かんがい用水  
堤高：48m 堤頂長：215.9m  
堤体積：654,000立方m  
湛水面積：29ha 総貯水量3,500,000立方m  
有効貯水量：3,230,000立方m



奥に見えるのが洪水吐からの導流部で、水平部分が長い。その先はスキージャンプ式で放水される。

国土交通省北海道開発局が国営畑地帯総合土地改良パイロット事業美幌町の事業の一つとして建設し、オホーツク東部広域農業水利管理協議会（構成自治体：美幌町、大空町）が管理する灌漑用のダムである。

この地域は日照率が高く、年間降水量が比較的少ないため、古梅ダムは、地域の貴重な水瓶となっている。近年は、古梅ダム周辺の林道を散策するウォーキングも実施されるなど、観光スポットとして活用しようという動きもある。

file05

## 緑ダム

オホーツクの農業用ダムとしては最大規模を誇る。北海道初の小水力発電を事業化。



オホーツクの農業用ダムとしては最大で、ダム湖の背景にそびえる標津岳の山容も美しい。

緑ダムは、日本百名山・斜里岳を源とする斜里川水系アタックチャ川にあり、総貯水量は七一〇万立方メートルと、オホーツク管内にある五つの農業ダムの中では最大である。

また、緑ダムは全国的にも推進されている農業用ダムでの小水力発電事業化を決定。北海道が農業用水を活用した小水力発電を整備するのは初めての例となる。小水力発電は規模は小さいものの、通年を通して安定した発電が可能ということで、全国的にも導入例が増えている。



網走市、清里町、斜里町、大空町、小清水町の5市町村の農地へ水を供給している。

## DATA 緑(みどり)ダム

ダム形式：ロックフィル  
河川名：アタックチャ川／斜里川水系  
所在地：北海道斜里郡清里町国有林地内  
位置：北緯43度40分13秒、東経144度37分45秒  
着工年：1974年 完成年：2003年  
用途：灌漑  
堤高：73m 堤頂長：345.0m  
堤体積：1,998,000立方m  
湛水面積：53ha 総貯水量：7,100,000立方m  
有効貯水量：6,400,000立方m

file06

## 雄武ダム

牧草地の灌漑を目的にして、家畜糞尿を循環させる肥培灌漑の機能を有している。



堤頂の長さは234m、堤体の高さは53.6mで13階建てのビルに匹敵する(写真提供/網走開発建設部)

## DATA 雄武(おうむ)ダム

ダム形式：ロックフィル  
河川名：雄武川水系イソサム川  
所在地：北海道紋別郡雄武町  
位置：北緯44度28分51秒、東経142度53分04秒  
着工年：1989年 完成年：2009年  
用途：灌漑用水  
堤高：53.6m 堤頂長：234m  
堤体積：883,000立方m  
湛水面積：22ha 総貯水量3,300,000立方m  
有効貯水量：2,700,000立方m



ダムへの道は途中で通行止めになっているため許可を得ずに見に行こうとしてもいけないので注意を。

雄武中央地区は、保水性の低い粘性の土壌であるとともに降水量も少ないため、干ばつ被害が頻発していた。そのため、主に牧草地の灌漑用水を確保するために建設されたのが雄武ダムである。

また、雄武ダムの特長として、酪農によって排出される家畜の糞尿を水で薄めて、パイプラインで圃場に散布する肥培灌漑(家畜の糞尿を肥料液として導水すること)により、土壌の養分保持力を高め、購入肥料を節減するという機能も有している。

file07

## 平成高架橋

北見市の大正地区と昭和地区を結ぶ。建設工期も昭和と平成をまたいだため、「平成」を冠して名付けられた。



大正地区と昭和地区の間の谷を、直線的に横断する平成高架橋。

file08

## 栄浦大橋

一般道の橋ではなく、漁港内施設の橋。漁港内の橋としては全道一の長さである。



栄浦大橋は一般道路に架かる橋ではなく、漁港施設の一部という位置づけだ。

## DATA 平成高架橋

位置：北海道北見市  
構造：PC橋（箱桁ラーメン橋）、橋台2基、橋脚2基  
橋長=172m  
橋幅=8.7m  
最大橋脚高=29m  
工事期間：1988（昭和63）年～1990（平成2）年  
開通：1990（平成2）年10月

この写真でいうと、手前の道路が道道北見常呂線で、北見市街地に向かつている。橋を右方向へ行くと畑作地帯が広がる大正地区。橋の左方向は、戦前から昭和四十年代まで果樹栽培が盛んだった昭和地区。つまり大正と昭和を平成が結んでいることになる。

この粋なネーミングは、橋の建設工事が昭和から平成にまたがって行われたこともあり、道・市・地域住民の協議によって決まったそうだ。

平成高架橋は、北見市街地の北側を大きく迂回する農業基幹道路整備の一環として行われ、大正と昭和地区を直線的につなぐために架けられた。

橋脚の高さは最大約三〇メートルあり、間近で見るとなかなかの威容である。またこうしてネーミングの由来を知ると、見え方も少し違ってくるかもしれない。

サロマ湖のほぼ東端に位置する栄浦漁港は、カキ・ホタテ養殖漁業の拠点の一つである。栄浦漁港から約八キロメートル先に、サロマ湖第2湖口が一九七九（昭和五四）年に開削されたのに伴い、利用漁船が増加。これに対応するため、漁港整備の一環として橋の建設が進められた。

そのためこの橋は、道路に架かる橋ではなく、漁港内施設という位置づけである。橋長二八六・八メートルは、漁港内橋としては全道一、全国でも三番目の長さだ（完成時）。

栄浦大橋の完成まではいかだなどの船で対岸と行き来していたらしい。車だと栄浦地区からワッカ地区までは、サロマ湖畔を約一五キロメートル迂回していたのが、栄浦大橋の完成によって二八六・八メートルで直結した。

## DATA 栄浦大橋

位置：北海道北見市常呂町字栄浦  
構造：PC橋（合成桁、箱桁）、橋台2基、橋脚7基  
橋長=286.8m  
橋幅=9.9m  
最大橋脚高=9.0m  
工事期間：1983（昭和58）年～1988（昭和63）年  
開通：1988（昭和63）年10月13日

file09

きゆうむかえきてい  
旧武華駅通

(北見市留辺薬町開拓資料館)

オホーツク地方で現存する最古の駅通。開拓時代の道具などを展示。



1920（大正9）年の建設。2階建て部分は1931（昭和6）年に増築された。現在内部は金・土曜のみ公開されていて、見学には予約が必要だ。

駅通は、もともとは江戸時代からあった飛脚の中継場所であった宿駅が基礎となっているが、北海道では開拓とともに独自の発達を遂げていった。

当初、道内には江戸幕府から引き継がれた一二六か所の駅通があり、土地区割りや道路作りの技師ら、公用の旅人専用の宿泊施設として利用されていたようだ。やがて多くの入植者がやって来るようになると、彼らのための宿泊施設や荷物の運び役が必要となり、そのため明治政府は土地土地の有力者に駅通を設置するよう求め、国費で統一規格の建物と運送用の馬などを用意するようになった。

また郵便局の機能も兼ねていて、道内では延べ六七六か所で駅通が開業されたが、全部または一部が現存するのは八か所だけとなっている。

北海道の開拓が進み、鉄道開通が各地で見られるようになると、次第に駅通はその役割を失い、閉鎖されていき、そして最終的に一九四八（昭和二三）年に、駅通制度そのものが廃止されることになった。

北見市留辺薬にある旧武華駅通は、一九二〇（大正九）

file10

きゆうかみもべつえきてい  
旧上藻別駅通  
(鴻之舞金山資料館)

民間有志らによって保存され資料館に。国の登録有形文化財にも指定されている。



邸内では鴻之舞金山に関する資料展示のほか、古いレコードのコレクションもあり蓄音機で聞かせてもらえることもある。

年に建設された現存する管内最古の駅通だ。建設当時は平屋で「駅通所建築標準図」とほぼ同じ間取りである点も貴重である。一九三六（昭和一一）年に駅通廃止。一九七〇（昭和四五）年町に寄贈され、当初の状態に復元された。

上藻別駅通は鴻之舞金山跡地の近くにあり、一九二六（大正一五）年に建設された。現在は鴻之舞金山資料館として公開されている。戦前の北海道独特の建築形態を有する古建築物として、二〇〇八（平成二〇）年国の登録有形文化財に指定された。

DATA 旧上藻別駅通

所在地：紋別市上藻別 297-1  
建設：1926（大正15）年  
構造：木造2階建て  
国指定登録有形文化財  
■公開期間：4月末～11月末  
■開館時間：9：30～15：30  
■休館日：月曜日  
■料金：無料  
■問い合わせ先：上藻別駅通保存会  
TEL：0158-26-5110

DATA 旧武華駅通

所在地：北見市留辺薬町の湯  
建設：1920（大正9）年  
1931（昭和6）年増築  
構造：木造2階建て  
■公開期間：通年  
金・土曜日のみ開館（要予約）  
■開館時間：9：00～17：00  
■料金：無料  
■問い合わせ先：留辺薬教育事務所  
TEL：0157-42-2723

file11

越川橋梁（第一幾品川橋梁）

国の有形文化財にも登録されている戦前のコンクリート製アーチ橋。しかし一度も列車が走ることはなかった。



全長 147m、最大地上高 21.6m のコンクリート製アーチ橋で、当時の土木技術を伝えるものとして国の有形文化財に登録されている。

鉄道建設は、言うまでもなく国策によって進められた。根北線は一九二二（大正一一）年に、国防の観点から、斜里から標津を經由して根室に至る路線として計画された。一九三八（昭和一三）年に着工され、斜里から越川がまず完成。延伸を見越して越川・上越川間（未開通）の途中に造られたのがこの越川橋梁（正式には第一幾品川橋梁だ。一九四一（昭和一六）年、太平洋戦争の影響で建設が中断された。

越川橋梁は戦中の資材不足のため鉄筋を使用しないコンクリート製十連アーチ橋で、戦前に造られたコンクリート製鉄道橋としては道内最大と言われている。

根北線は戦後の一九五七（昭和三二）年に斜里駅・越川駅が開通したが一九七〇（昭和四五）年に廃止。越川橋梁を列車が走ることはなかった。

DATA 越川橋梁

コンクリートアーチ橋  
全長 147m / 最大地上高 21.6m  
1939（昭和14）年 工事着工  
1940（昭和15）年 完成  
1941（昭和16）年  
根北線の建設は中断  
1973（昭和48）年  
国道244号拡張工事のため国道上の橋脚2本を撤去

file12

鴻紋軌道鉄橋「五号杭橋」

かつて栄華を誇った鴻之舞鉱山。その名残を伝えるものは、いまや廃墟となった物悲しい痕跡だけだ。



運行わずか5年ほどで廃止となった鴻紋軌道。道道305号線をまたぐ五号杭橋は鉱山水送水施設として現在も活用されている。

今はまったたく人が暮らしている形跡はないが、かつては約一万人以上が暮らすまちがここにあった。金の産出量では国内第三位を誇った鴻之舞鉱山だ。

一九一七（大正六）年に住友（のちの住友金属鉱山）が本格的に金採掘の事業に乗り出し、人口もピークの一九四二（昭和一七）年頃には一万三千人を数えた。

鴻紋軌道は、紋別中心地と鴻之舞との間に敷設され、鴻之舞鉱山から産出されたものや、鴻之舞への物資輸送の役割を果たした。運行期間は一九四三（昭和一八）年から、一九四八（昭和二三）年までのわずか五年間であった。

道道305号を跨ぐ鉄橋が五号杭橋で、運行時の姿を唯一とどめているものだ。そのほかにも数力所橋桁だけが残っている。

一九七三（昭和四八）年一〇月三十一日に閉山すると、わずかにひと月足らずで無人地帯になってしまった。

DATA 鴻紋軌道

1940（昭和15）年10月  
工事着工。  
1943（昭和18）年6月  
竣工。  
1948（昭和23）年  
廃止。  
営業距離  
約28km（紋別～元山）  
駅数：14（起終点を含む）



旧国鉄北見相生駅・  
北見滝ノ上駅・上興部駅

その歴史をとどめる駅舎が残されている。



1985（昭和60）年廃止当時のまま残されている北見相生駅。舎内は駅事務室の当時の様子がわかる。



構内除雪車キ703のほか普通車両のキハ2269、スハフ42502などが保存展示されている。

DATA 相生線（あいおい）

1924（大正13）年  
美幌・津別間開業  
1925（大正14）年  
津別 - 北見相生間延伸し全通  
1985（昭和60）年 全線を廃止  
営業距離：美幌 - 北見相生 36.8km  
駅数：14 駅（起終点駅含む）

一九八〇（昭和五五）年に国鉄再建法が成立したのに伴い（一九八七年に国鉄分割民営化）、第一次廃止対象路線となった道内七路線のうち、オホーツク地域では相生線、渚滑線、興浜南線の三つが対象となった。最も早くに廃止となったのは、相生線、渚滑線の一九八五（昭和六〇）年四月一日、興浜南線は同じ年の七月一日だった。※根北線は国鉄再建法以前の一九七〇（昭和四五）年に既に廃止。第二次廃止対象路線となったのが、湧網線（一九八七年三月二〇日廃止）、名寄本線（一九八九年五月一日廃止）、池北線（一九八九年六月四日、北海道ちほく高原鉄道ふるさと銀河線に転換。二〇〇六年四月二一日廃止）。

一九六八（昭和四三）年当時、管内七路線があつたうち、現在残るのは石本線と釧網線のわずかに二路線となつてしまつた（P一八一九参照）。路線廃止とともに、多くの駅舎も失われたが、当時の駅舎を資料館として保存し公開しているのが、ここに紹介した三力所である。相生線の終端駅だった北見相生駅は、現在は「道の



いまでも美しい姿を見せる木造モルタルづくりの北見滝ノ上駅舎。

駅あいおい」として整備され、駅舎やホーム、車両などが保存展示されている。懐かしのキハ二二系車両に乗ることもできる。

渚滑線の終着駅だった北見滝ノ上駅は、現在は駅舎記念館として公開されている。町が林業で発展したのに合わせ、木材の積出駅として貨物最盛期の一九五五（昭和三〇）年頃は五番線まであつたよつた。

もう一つは、名寄から紋別を経て遠軽へ続いた名寄本線の上興部駅。駅は西興部村内にあり、名寄から行くくと西興部駅の一つ手前の駅で、西興部駅との駅間は二キロメートル。旧駅構内は一九九四（平成六）年から西興部村により「上興部鉄道記念館」として整備されている。車両の動態保存のほか、ホームには本物の駅名標なども保存されている。

DATA 渚滑線（しよこつ）

1923（大正12）年  
渚滑 - 北見滝ノ上間開業。  
1985（昭和60）年 全線を廃止  
営業距離：渚滑 - 北見滝ノ上  
34.3km  
駅数：12（起終点を含む）



「北見滝ノ上駅舎記念館」の舎内には、当時の時刻表、駅名標、行先標、乗車券、備品などの渚滑線関連資料が保存・展示されている。



「上興部鉄道記念館」となっている旧国鉄名寄本線上興部駅舎。ホームや線路も残され、気動車キハ27109とDD14形除雪車DD14302号機のロータリー式除雪機構部が連結された状態で静態保存・展示されている。

DATA 名寄本線（なよろ）

1940（昭和15）年10月：着工。  
1943（昭和18）年6月：竣工。  
1985（昭和60）年：廃止。  
営業距離：138.1 km（名寄 - 遠軽間）  
駅数：40（起終点を含む）



## オホーツクの国鉄路線の変遷

### [現在運行している路線]

#### 石北本線（新旭川～網走）

- 1912（大正元）年 網走本線（池田 - 野付牛 - 網走）が開通
- 1922（大正11）年 新旭川 - 愛別間が石北線として開業
- 1927（昭和2）年 遠軽 - 丸瀬布間が石北東線として開業
- 1932（昭和7）年 新旭川 - 遠軽間が全線開通  
湧別線（遠軽 - 野付牛）を編入して、新旭川 - 野付牛を石北線と改称
- 1961（昭和36）年 網走本線（北見 - 網走）を統合して石北本線と改称

#### 釧網本線（網走～東釧路）

- 1924（大正13）年 網走本線の延伸として網走 - 北浜間が開業
- 1927（昭和2）年 斜網線（釧路 - 標茶）が開業
- 1931（昭和6）年 網走 - 東釧路が全線開通（網走本線網走 - 札弦間を釧網線に編入）
- 1936（昭和11）年 釧網本線に改称

### [廃止となった路線]

#### 名寄本線（名寄～遠軽）

- 1915（大正4）年 遠軽 - 社名淵間が湧別軽便線として延伸開業
- 1919（大正8）年 名寄 - 下川間（16.5km）が名寄線として開業
- 1921（大正10）年 中湧別 - 興部間が名寄東線として開業  
名寄 - 上興部間を名寄西線に改称  
上興部 - 興部間が延伸開業し全通開通。名寄線として統合
- 1989（平成元）年 全線を廃止

#### 渚滑線（渚滑～北見滝ノ上）

- 1923（大正12）年 渚滑 - 北見滝ノ上間を渚滑線として開業
- 1985（昭和60）年 全線を廃止

#### 興浜南線（興部～雄武）

- 1935（昭和10）年 興部 - 雄武間を興浜南線として開業
- 1985（昭和60）年 全線を廃止
- ※北見枝幸まで延伸し興浜北線と接続予定で、1960（昭和35）年に雄武 - 北見枝幸間の着工が決定し、工事が進められたが1977（昭和52）年度をもって中止された。

#### 湧網線（中湧別～網走）

- 1935（昭和10）年 中湧別 - 計呂地間を湧網西線  
網走 - 卯原内間を湧網東線として新規開業
- 1953（昭和28）年 中湧別 - 網走間が全通し湧網線とする
- 1987（昭和62）年 全線を廃止

#### 池北線（北見～池田）

- 1910（明治43）年 網走線として池田 - 陸別間が開業
- 1911（明治44）年 陸別 - 野付牛間が延伸開業
- 1912（大正元）年 野付牛 - 網走間開業網走線全通。  
池田 - 野付牛 - 網走間を網走本線と改称
- 1961（昭和36）年 北見 - 網走間を石北本線に編入。  
池田 - 北見間を池北線に改称
- 1989（平成元）年 6月3日：JR池北線としては廃止  
6月4日：第3セクター「北海道ちほく高原鉄道ふるさと銀河線」として開業

#### 相生線（美幌～北見相生）

- 2006（平成18）年 全線を廃止
- 1924（大正13）年 美幌 - 津別間開業
- 1925（大正14）年 津別 - 北見相生間延伸開業し全通
- 1985（昭和60）年 全線を廃止

#### 根北線（斜里～越川）

- 1957（昭和32）年 斜里駅 - 越川駅間開業
- 1970（昭和45）年 全線廃止



file14

あばしりけいむしよせいもん  
網走刑務所正門

日本最北東端の刑務所。  
所内のレンガ工場でレンガを作り、  
受刑者によって正門や赤レンガ塀が造られた。



1924（大正13）年に受刑者によって造られたレンガ造りの正門。※大正11年完成という資料もある（写真提供・網走観光協会）

網走刑務所は、日本の最北東端にある刑務所である。正式な刑務所であるにもかかわらず、観光名所の一つとなっているのは実に珍しい。

開設は一八九〇（明治二三）年だが、当初の建物は一九〇九（明治四二）年、山火事の飛び火が原因でほぼ全焼した。その後、明治末年にはレンガ工場を新設して、このレンガ造りの正門や赤レンガ塀が受刑者の手によって造られた。正門の完成は一九二四（大正一三）年。※大正一一年としている資料もある。

門の形としては左右対称だが不等辺な七角形。赤レンガの中に、黒っぽいレンガが見られるが、これは窯の中に塩を入れ、一一六〇度以上の高温で焼き上げたもの。現在はこのような焼き方はできないため、レンガ建築の歴史を知るうえで重要なものといえる。

## DATA 網走刑務所正門

所在地：網走市三眺  
建設：1924（大正13）年  
構造：レンガ造  
設計者：金子肇、佐藤源之丞  
1890（明治23）年  
「釧路監獄署網走囚徒外役所」  
として開設  
1909（明治42）年 火災（ほぼ全焼）

file15

てい  
ピアソン邸（ピアソン記念館）  
きねんかん

アメリカ人宣教師ピアソン夫妻が  
大正期を過ごした洋館。  
日本最北ヴォーリス設計の建物である。



ピアソン夫妻が1914（大正3）年から1928（昭和3）年までの15年間を過ごした私邸。

アメリカ人宣教師ジョージ・ペック・ピアソンとアイダ夫人が、一九一四（大正三）年から一九二八（昭和三）年五月まで一五年間過ごした私邸。設計者が日本で数々の西洋建築を残したアメリカ人建築家、ウィリアム・メレル・ヴォーリスであることが近年確認され、日本最北のヴォーリス設計の建物といえる。

米国様式の移民住宅にスイス風の山荘を取り入れたデザインで、テラスが張り出し、大きな窓は上下に開閉するなど、当時の日本では先進的な建築であった。一九七一（昭和四六）年にピアソン記念館となり、一階の居間には夫妻の足跡を紹介した展示や、アイダ夫人愛用のオルガンも残されている。二階は、ヴォーリス資料室になっている。

## DATA ピアソン邸（ピアソン記念館）

所在地：北見市幸町7丁目4番28号  
建設：1914（大正3）年  
構造：木造2階建て  
設計者：W.Mヴォーリス  
1971（昭和46）年 ピアソン記念館として開館  
2001（平成13）年 北海道遺産に選定  
■開館時間：9：30～16：30 ■料金：無料  
■問合せ先：0157-23-2546（NPO法人ピアソン会）

file16

あばしり しりつきまうどはくぶつかん  
網走市立郷土博物館

北海道の代表的建築家・田上義也の設計。  
戦前の北海道の洋風建築の  
代表的な建物の一つである。



建築家・田上義也設計による特長とともに、師フランク・ロイド・ライトの影響も随所にみられる貴重な建物である。

この博物館の基礎となつたのが、モヨロ貝塚の発見者であった米村喜男衛（初代館長）が発掘した個人資料の散逸を防ぐため、開館時は「北見郷土館」であった。その費用の多くは、当時鴻之舞鉱山を経営していた住友財閥の支援を受けて建設された。

設計は、戦前から戦後にかけて活躍した北海道を代表する建築家・田上義也（一八九九―一九九二）である。平面は十字型で、中央にドームがある。円柱やブロックを用いたのは、一九三〇年代の作品に特徴的な雪国型造形の表現とされる。ドームに昇るらせん階段が美しく、田上は戦後の作品にも多く用いている。また、館内の小窓にあるステンドグラスや、展示室の天井勾配は、田上の師・アメリカの世界的建築家フランク・ロイド・ライトの影響と思われる。

DATA 網走市立郷土博物館

所在地：網走市桂町1丁目1番3号  
建設：1936（昭和11）年  
構造：木造2階建て  
設計者：田上義也  
■開館時間：9：00～17：00  
冬期間（11月～4月）16：00まで  
■休館日：月曜、祝日、年末年始  
■料金：大人120円  
小中学生60円  
■問合せ先：0152-43-3090

file17

きゅうしゃりちようりつと しょかん  
旧斜里町立図書館

役場庁舎から図書館へと転用され、  
八五年間も町民から利用されてきた、  
斜里町の歴史的建物。



2014（平成26）年9月に閉館され、今後の活用・保存については、まだ決まっていない。

DATA 旧斜里町立図書館

所在地：斜里町本町42  
建設：1929（昭和4）年  
構造：木造2階建て  
設計者：伊藤某  
1968（昭和43）年まで斜里町役場庁舎として使用  
1970（昭和45）年 斜里町立図書館に転用  
2014（平成26）年9月 閉館  
現在、建物は閉鎖中

斜里町役場庁舎として一九二九（昭和四）年に建築された。その後の改修によって鉄筋で補強されたが、建築当時は木造モルタル塗り、ハーフティンバーと呼ばれる木造の構造体を外壁に現わした特長がみられる。上下階に連続した縦長窓などにその特徴がみられ、またデザインの印象の決め手にもなっている。一九七〇（昭和四五）年から町立図書館となつて、二〇一四（平成二六）年九月に閉館するまで、八五年間も町民に利用し続けられたことになる。

手前の屋根上にある望楼は、いつ付けられたのかは定かではないが、おそらく戦時中に付けられ、敵機の接近を見張るための監視塔にしたのではないかと考えられる。

file18

## 北見ハツカ記念館

（旧北聯北見工場ハツカ研究所）

世界を席卷した北見ハツカのシンボリックな建物。



1935（昭和10）年建築。ハツカ産業の歴史を語るものとして日本近代化遺産に認定されている。

北見でのハツカ栽培は明治三〇年に始まったとされる。最盛期は一九三九（昭和一四）年で、「HOKUREN」ブランドとして海外にも輸出され、当時の世界市場の約七割を占めたとされる。その北見ハツカの拠点となったのが、一九三三（昭和八）年に作られた北見野付牛薄荷工場で、その翌年に建てられた研究室が、現在の北見ハツカ記念館である。

建築様式としては、半切妻屋根や、外壁のドイツ式下見板など、ドイツスタイルが見て取れる。

中の間取りは現在それぞれ展示室となっているが、二階の元貴賓室、元工場長室には、天井に中央飾りを施すなど贅沢な造りとなっている。

## DATA 北見ハツカ記念館

（旧北聯北見工場ハツカ研究所）

所在地：北見市南仲町1丁目7-28

建設：1935（昭和10）年

構造：木造2階建て

1983（昭和58）年 ホクレン北見ハツカ工場閉鎖

1986（昭和61）年 北見ハツカ記念館開館

2007（平成19）年 日本近代化遺産に認定

■開館時間：9:00～17:00（夏期）

9:30～16:30（冬期）

■休館日：月曜（祝日の場合は翌日） 料金：無料

■問合せ先：0157-23-6200

file19

## 旧五十嵐家住宅（ハツカ御殿）

北見ハツカの隆盛を物語る、当時の贅を尽したハツカ商・五十嵐弥一の私邸。



1937（昭和12）年、ハツカ商・五十嵐弥一の私邸として建てられた。1994（平成6）年に現在地に移築された。（写真提供：北見田園空間情報センター）

この建物はハツカ商・五十嵐弥一の私邸として、一九三七（昭和一二）年に建築されたもので、まさにハツカ景気絶頂期の名残を今に伝えている。

建築は、棟梁の山中金五郎が一人で手がけたとされ、三年がかりで完成させたとされている。

外観を一目見て重厚感を感じるの、屋根が社寺に用いられる入母屋造りになっているためだろう。

内部も公開されていて、大広間の付書院や、一刀彫の欄間彫刻など、贅を尽くしていたのが見どころである。



室内には一刀彫で仕上げた彫刻欄間など、いたるところに贅を尽くしたのが見て取れる。

## DATA 旧五十嵐家住宅（ハツカ御殿）

所在地：北見市仁頃町301（仁頃はっか公園内）

建設：1937（昭和12）年

構造：木造平屋建て

施工者：山中金五郎（棟梁）

1994（平成6）年

仁頃はっか公園の一部として整備。

■開館期間：5月1日～10月31日

■開館時間：10:00～16:00

■料金：無料

■問合せ先：0157-33-2877

（北見田園空間情報センター）

## 屯田兵屋（北見・端野・湧別）

とんでんへいやは  
きたみ たんの  
ゆうべつ  
道内各地に残る屯田兵屋。  
オホーツク地域では三か所の資料館に  
復元保存されている。



1897（明治30）年建てられた野付牛屯田兵村、橘家と寺西家の部材を合体して復元させた屯田兵屋。

北海道開拓の歴史遺産である屯田兵屋は、現在も道内各地に残っているが、それらを含めて「屯田兵村と兵屋」として北海道遺産に登録されている。

屯田兵屋とは、屯田兵が入地する際、各戸に給与された家屋のことで、標準とされた構造は、木造平屋、板張りに桁算きで、面積は一七坪五合（約五八平方メートル）。間取りは、土間に、炉を囲んだ六畳の板の間、六畳と四畳半の畳の間で構成され、流し、便所、押入が配置されていた。一八七五（明治八）年、札幌琴似に二〇〇戸が作られたのが最初で、北海道全体では屯田兵制度が廃止された一九〇四（明治三七）年までに、三七兵村、七三三七戸が作られたとされる。

オホーツク地域には、北見・端野・湧別の資料館に屯田兵屋が保存されている。北見の北網圏北見文化センターに保存されているものは、一八九七（明治三〇）年に建てられた橘家（第三中隊二区）と寺西家（第二中隊四区）を解体し、その部材を合体させて復元したものだ。

北見市端野町の歴史民俗資料館に保存されているものは、一八九八（明治三一）年建築の、高垣家（第一中隊三区）のものを復元したものの。端野（下野付牛）の兵村は、一〜三区に分けられたが、現在の区割りにも生きている。現在一区神社拝殿となっているのは、第一中隊被服糧秣庫で、北見屯田本部関係としては唯一残るものだ。湧別町のふるさと館JRYに残されている屯田兵屋は、一八九七（明治三〇）年に建てられたものであるが、誰の家であったかは明らかではない。また湧別町には、当時の区画の北兵村地区と南兵村地区が現在でも残っている。



「端野町歴史民俗資料館」にある屯田兵屋は1898（明治31）年築。

### DATA 端野町歴史民俗資料館

所在地：北見市端野町二区 471 番地 5

■開館時間：10：00～16：00

■休館日：月曜（※祝日は開館）

■料金：一般 140 円、高校生・大学生 80 円

■開館期間：5 月 1 日～11 月 7 日

■問合せ先：0157-56-2560



湧別町「ふるさと館JRY」にある屯田兵屋は1897（明治30）年築。

### DATA ふるさと館JRY

所在地：湧別町北兵村一区 588 番地

■開館時間：9：00～16：30

（入館は 16：00 まで）

■休館日：月曜（祝日は開館）、年末年始

■料金：大人 400 円、高校生 250 円

小中学生 200 円

■問合せ先：01586-2-3000

### DATA 北網圏北見文化センター

所在地：北見市公園町 1 番地

■開館時間：9：30～16：30

■休館日：月曜日・祝日の翌日、

年末年始

■料金：一般 660 円、

高校・大学生 390 円

中学生以下及び 70 歳以上無料

■問合せ先：0157-23-6700

file21

## 北海道家庭学校礼拝堂

ほっかいどうかていがっこうれいはいどう  
 大正期に建てられた希少な礼拝堂。  
 伝統的な教会堂の形態が採用され、  
 一〇〇年を経た今も現役で使用されている。



建設から100年になるが、現在でも毎週日曜日に礼拝が行われている。

北海道家庭学校は一九一四（大正三）年、留岡幸助によって設立された、「感化院」である（現在は児童自立支援施設）。留岡幸助自身一七歳の時にキリスト教の洗礼を受けた。そのシンボルがこの礼拝堂で、設立五年後の一九一九（大正八）年に竣工、完成まで四年を費やしたとの記録がある。ラテン十字形（四本の長さ）が等しい十字の平面、大屋根上の小尖塔、木地を露わした内外壁や床・天井など、簡素な意匠となっている。

設計は、北見のピアソン記念館と同じくヴォーリスではないかと考えられる。大正期の希少な教会堂で、建築意匠に優れ、歴史的価値の高い建造物として二〇一五（平成二七）年に道指定有形文化財に登録された。

### DATA 北海道家庭学校礼拝堂

所在地：紋別郡遠軽町留岡 34  
 建設：1919（大正8）年  
 構造：木造2階建て  
 1914（大正3）年  
 東京家庭学校社名淵分校として設立  
 1919（大正8）年 礼拝堂竣工  
 1968（昭和43）年  
 北海道家庭学校として分離独立  
 問合せ先：0158-42-2546  
 （北海道家庭学校）

file22

## 紋別武徳殿

もんべつおとくでん  
 隆盛を誇った鴻之舞鉦山の名残。  
 閉山後に紋別市に寄贈され、  
 現在地に移転、復元された。



現在は紋別市立の武道場として剣道、柔道、合気道、弓道などの活動に使用されている。

### DATA 紋別武徳殿

所在地：紋別市潮見町4丁目4番地  
 建築年：1940（昭和15）年  
 移転改築：1966（昭和41）年  
 敷地面積：2,899.17㎡（約877坪）  
 建築面積：591.71㎡（約179坪）  
 問合せ先：0158-24-5925

現在は紋別市立の武道場として活用されているが、もとは、かつて栄華を誇った住友鴻之舞鉦山の従業員並びに家族の福利厚生施設として建設されたものだ。建設年は一九四〇（昭和一五）年で、その時の名称は「光風殿」といった。

しかし、一九七三（昭和四八）年に鉦山の閉山が決定する。折しもその頃、紋別市内にも武道館建設の声が上がリ、鴻之舞鉦業所が光風殿を市に寄贈することとなった。閉山決定の翌年、一九七四（昭和四九）年に現在地に移転、復元された。そしてこの時、名称も「武徳殿」へと改められた。

道場は一〇畳もあり、建築当時、どれだけの費用をつぎ込んだかは不明だが、鴻之舞鉦山がいかほどの繁栄ぶりであったかが、伝統建築を存分に取り入れた造りから伝わってくる。

file23

にほん  
**日本キリスト教会遠軽教会**  
 きょうかいえんがるきょうかい  
 遠軽開拓民の心の拠り所となった教会。  
 昭和六年に建築され、八〇年以上  
 変わらぬ風情でたたずんでいる。



1931（昭和6）年から変わらぬ姿でたたずむ教会。1981（昭和56）年に大規模な改修が行われた。

遠軽町の開拓は、一八九七（明治三〇）年、キリスト教的移住団体「北海道同志教育会」の第一回移民団が入植したことに始まる。しかしその翌年には、未曾有の洪水に見舞われ、開拓を断念し故郷へ帰る者が相次ぎ、残された者も希望を失い困窮を極めた。そうした人たちが心の拠り所として、一八九九（明治三二）年に集会場を作り、それが現教会の母体となった。明治末ごろには本格的な公会堂を作り、一九三一（昭和六）年に焼失したが、すぐに建て直されたのが、現在に残るものである。市街地が大きく変貌する中、この空間だけは時を止めている。



窓には麦の穂を思わせる意匠を施し、円形の窓はバラ窓。

**DATA 日本キリスト教会遠軽教会**

所在地：紋別郡遠軽町大通南2丁目  
 建設：1931（昭和6）年  
 構造：木造2階建て  
 設計者：池畑敏行  
 1897（明治30）年  
 キリスト教的移住団体移民団が入植  
 1899（明治32）年 集会所を建築  
 1912（明治45）年 本格的な公会堂を建築  
 1931（昭和6）年  
 公会堂を焼失。同年に現教会建築。

file24

もんべつとうだい  
**紋別灯台**

おそらく日本ではここだけであろう  
 住宅街の中に建つ灯台。  
 その経緯は記録に残っていない。



1960（昭和35）年に建築された紋別灯台。市街地の中に建つ灯台は、日本ではおそらくここだけだろう。

**DATA 紋別灯台**

所在地：北海道紋別市花園町8  
 建設：1960（昭和35）年  
 構造：塔形、コンクリート造  
 塗色構造：白赤横線塔形  
 灯質：単閃白光、  
 10秒毎に1閃光、  
 光度：330,000カンデラ  
 光達距離：22.5海里（約41km）  
 塔高：13m 灯高：80m  
 初点灯：1960（昭和35）年  
 12月28日



紋別公園内に建っている  
 といえわかりやすい。

現在日本国内には三千二百余りの灯台があるが、市街地の中に建つ灯台は、おそらく他に見当たらないだろう。紋別灯台が完成したのは一九六〇（昭和三五）年だが、どういった経緯で港から離れた高台に灯台を建設したのか、記録は残っていない。紋別港は、戦前はオホーツク沿岸の漁業基地として発展し、戦後の一九六〇（昭和三五）年に北洋漁業が再開されたからには最盛期を迎えた。こうした状況で港湾の改良・拡大が図られ、その一環として紋別灯台の建設も進められたと考えられる。完成当時は白と黒で、地元では「シロククロ灯台」と呼んでいたらしいが、一九八四（昭和五九）年の改修の際に、現在の赤白に塗り替えられた。



file25

あばしりこうぼうしいわ

網走港帽子岩ケーソンドック

日本に四か所しかないケーソンドックの一つ。天然の岩盤をくり抜いた稀な構造で、今も現役で機能している。



天然の岩盤をくり抜いた極めて珍しい構造である。(写真提供：網走開発建設部)

まずケーソンとは、防波堤などの水中構造物や、地下構造物を構築する際に用いられるコンクリート製、又は鋼製の大型の箱のこと。

ケーソン製作の専用ドックは、現在全国でも四カ所しかなく、しかも網走のケーソンドックは、ドライドックと呼ばれる天然の岩盤をくり抜いた、極めて珍しい構造である。一九二二(大正一一)年頃、網走港修築工事の付帯施設として建設されたもので、着工から十年以上をかけ一九三〇(昭和五)年に完成した。一九八九(平成元)年に改造されたが、周囲の壁面は現在も岩盤をそのまま利用している。また建設当時のまま現存するものは、ドック最奥部の壁面と階段、背後の防波堤などである。完成から八〇年以上たった現在も現役として機能している。「土木遺産」に認定されている。

DATA 網走港帽子岩ケーソンドック

形式：ドライドック式  
3段式ゲート(外板付きトラス構造)  
長さ：70.0m、幅：19.5m  
深さ：7.2m、開口部：16.0m  
ドック内の水量：12,000 m<sup>3</sup>  
製作ヤード全体の面積：11362 m<sup>2</sup>  
製作可能なケーソン：1辺 15m  
喫水：7.8m まで 14m  
着工：1923(大正12)年  
完成：1930(昭和5)年

file26

アイスブーム

サロマ湖への流水の侵入による、ホタテ・カキ養殖施設破損の被害を防ぐ、世界初のアイスブーム。



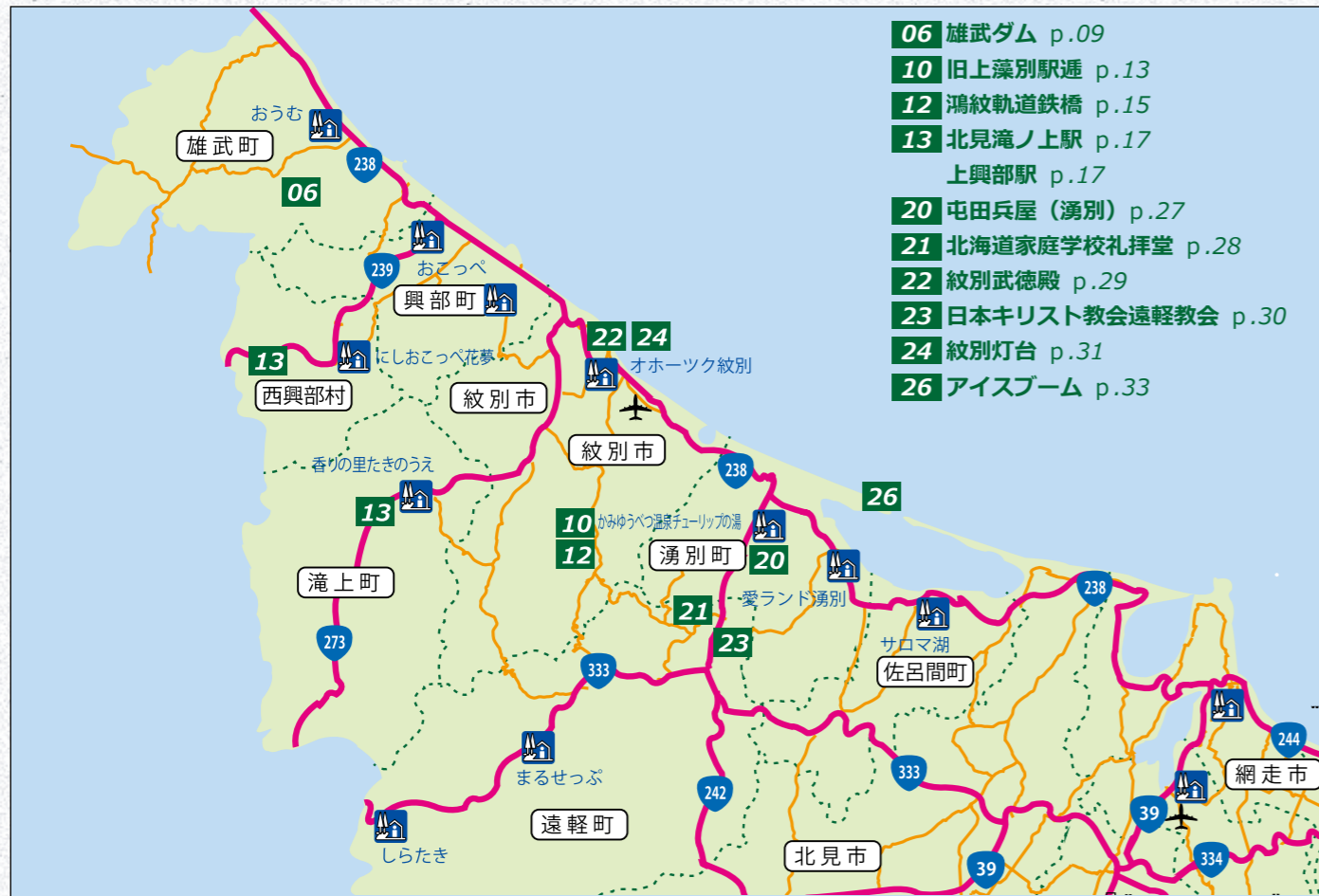
海水(流水)を堰き止めるものとしては世界初の例となったサロマ湖のアイスブーム。(写真提供：網走開発建設部)

サロマ湖は、ホタテやカキ養殖の一大産地であるが、かつては湖口から流水が流入することで、漁船の安全航行が妨げられ、養殖施設が壊れる被害が頻発していた。そのため考案されたのが世界初の「アイスブーム」(IceBoom 流水堤)だ。アイスブームは、湖口から約四〇〇メートル湖に入った地点を中心に、半円を描くように一四本の支柱を一〇メートル間隔で打ち込み、直径一・二メートルの円筒パイプと、深さ四メートルのワイヤネットで流水を受け止める。一枚のネットですべて約五〇〇トンの荷重に耐えられるようになっていく。

欧米では、河川水の制御に使われる小型のものが作られた事例はいくつかあったが、これを海水に対して世界で初めて適用したのがサロマ湖で、考案したのが当時北大工学部教授だった佐伯 浩氏である(のちに第一七代北大総長)。

一九九四(平成六)年に着工し、二〇〇一(平成一三)年に関連施設を含めて完成した。平成九年度に一般社団法人全日本建設技術協会が選定する全建賞(港湾部門)を受賞している。

MAP オホーツク西部



MAP オホーツク東部

